

ジャカルタ稲門会

ジャカルタ稲門会について

同会の早期戦などを開催。早慶戦では2009年春の対抗戦まで10連勝。20年近く会長を務めるジャカルタ稲門会の阿部武氏と、30年近くジャカルタ三田会会長を務め昨年急逝した永井節郎氏の2人の名物会長による試合後のコメントの応酬が風物詩となっていた。

昨年からは、実るほどに頭を垂れる稲穂からとれるコメにちなみ、「こめこめ米米会」と称する懇親会も始めた。帰国するメンバーにはジャティ(チーク)でできた木彫りのネームプレート^{こめこめ}をプレゼントしている。



米米会。帰国者には木彫りのネームプレートが贈られる

ジャカルタの魅力



近代的な現代のジャカルタ

日本へのLNG(液化天然ガス)主要供給国となっているほか、1960年代後半から日本の大手メーカーがインドネシアに進出しており、両国は密接な関係だ。世界でも有数の親日国であることを背景に、自動車・二輪車市場の95%以上を日本メーカーが占める。

ジャカルタに今も残る老舗の日本料理店「菊川」。初代幹事の片岡隆氏(1959年商学)の記録によれば、1975年11月14日、その「菊川」に松本正一氏(1951年商学)をはじめとする商社や繊維会社の駐在員ら14人の稲門有志が集まり、ジャカルタ稲門会が産声をあげた。それから35年。「集り散じて人は変われど」、早稲田の伝統は脈々と受け継がれ、現在は約60人のメンバーが所属している。



日本料理店「菊川」の店構え。1975年、ここで第1回会合が開かれた

近年はゴルフや親睦会を中心に活動している。ゴルフは年2回の早慶戦や年1、2

インドネシアの首都ジャカルタ。人口1000万人近いアジアでも有数の大都市だ。著しい経済発展が続き、目抜き通りの両側には近代的なショッピングモールや高級ホテルが建ち並ぶ。一方、ビルの一歩裏に足を踏み入れれば、カンブンと呼ばれる庶民の下町風景が広がっている。

インドネシアは1997年のアジア通貨危機、1998年のスハルト政権崩壊という激動期を乗り越え、民主化への道を歩み始めた。2008年の世界金融危機を切り抜け、ユドヨノ政権が2009年に再選されると、2010年の経済成長率は6%を超えた。世界第4位となる2億3700万人の巨大市場を取り込もうと、外国投資家がこぞって注目している。



懐かしさを今に残すカンブンの風景



会長メッセージ

前任の井原氏から突然、会長職の引き継ぎをされ、1993年に第5代会長に就任いたしました。スハルト大統領のように長期になってはいけないと思いつつ、18年が過ぎました。アンワルさんが副会長を務めるなど、インドネシア人の会員も多いのが特徴で、より現地にとけ込んだ稲門会として、日本人とインドネシア人が協力していくことができるよう心がけています。

普段はゴルフや食事会などが主な活動です。会員はここで仕事をしている人たちが大半なので、負担を掛けないう大きく構えず、自然体で会を長く存続させるとの心構えで会を続ける一方、東日本大震災を受け、被災した校友向けの募金活動を始めたように、何かあればすぐに力を結集し、いつでも集まることができるような組織でありたいと願っています。

これまでのインドネシアの成長のスピードはゆっくりでしたが、インドネシアは世界でも数少ない、将来が明るい国です。日本人にとっても過ごしやすい国であり、これからの日伊関係を一層強めていくためにも、早稲田の火を絶やさずにゆっくりと会を大きくしていくことが大事だと思っています。

阿部武(1966年理工)

●夫婦ともゴルフをしているので、教育学部卒の妻(牧子さん)とともに、この5年ほど、稲門会に参加させてもらっています。夫婦がそろって同じ味方同士で本気になって楽しくゴルフをできる機会は稲門会しかなく、慶應や同志社との対抗戦では、一緒に「勝った勝った」と喜ぶこともでき、夫婦で同じ大学を出てよかったなと実感しています。

金井孝雄(1974年理工)



伝統のゴルフ早慶戦

会員からのメッセージ

●インドネシアで高校卒業後渡日。1年間日本語を習ってから理工学部資源工学科に入学。大学院に進学し鉱山現場研修を終えて1970年に帰国しました。言葉のハンディはありましたが、仲間や先輩と先生方の温かい気配りの中、8年間で自分は母校を愛するワセダマンになり、日本を第二の祖国と思っています。

両国の黄金の架け橋を創るという理念で、結成初期からゴルフ、ソフトボール、懇談会に積極的に参加しています。大きな声で都の西北、紺碧の空を歌うと、新しいエネルギーが湧き出てきます。常に元気よく、希望を持って、輝く未来を築き上げるのが早稲田の精神。インドネシアはたくさん抱えているのも事実ですが、日本も少子高齢化という深刻な問題を抱えています。数百年後には日本人が1人しか残らないのではないかと懸念さえあります。

「世界的に連携を強め、真剣に考え、問題解決に貢献しようではないか」との心意気で、日々、活動しています。

アンワル・ブルカダン副会長(1967年理工、69年工研修)

●野武士のように骨太で、建前なしの本音でざっくばらんに語り合って笑える仲間。ジャカルタ稲門会でも早稲田らしい仲間に出会え、心が落ち着き、楽しい思いをさせてもらっています。

インドネシアに新しく来た人にとっても、知らない土地で不安がある中、さまざまな分野の人たちがいて、いざという時にとても力になるネットワークで、いろいろなアドバイスをもらえるのも心強い限り。三田会との交流も海外ならではの心温まるものを感じています。

2000年から幹事長を務めています。阿部会長以下現役ジャカルタ稲門会の皆さん、歴代幹事の細谷尚央御大、梶田段二郎氏、石橋忠氏、川端秀二氏、ゴルフ10連勝の立役者中村智一氏、大谷智子氏、松永育子氏、大杉明氏他、たくさんの皆さんとのつながりに感謝しています。

北村浩太郎幹事長(1978年法学)